

番号	機関名	課題名	研究期間	研究概要	総合評価	評価委員コメント	委員コメントに対する研究機関の回答・考え方等
1	農林総合研究センター農業試験場	担い手経営を支援する水稲・大豆の安定生産技術の確立	H26～H28	作期分散のため、晩生品種を使った6月田植え-10月収穫の栽培体系を確立する。 大粒で機械収穫に適した大豆品種「里のほほえみ」の現地導入にあたり、品種の特性を最大限に引き出す栽培法を確立する。	A	○計画は妥当で成果が出ているので、今後の普及に期待する。 ○石川県大豆の収量品質の向上は需要者も求めるところであり、普及性が高いと考える。 ○規模の拡大、所得向上はポイントが明確で適切である。 ○農家にとっては朗報であり、収益力の向上につながれば良い。 ○大規模生産者ニーズへの対応、良食味・多収で実需要者ニーズにも対応できる有望品種の試験研究に対して高く評価する。 ○期待どおりの成果が得られている。 ○品種収量面での栽培技術の確立に向けた試験研究に対して高く評価する。 ○具体的な農家収入の視点を入れてはどうか。 ○次は酒米の開発等加工米の品種改良をお勧めする。	○ひやくまん穀は本年産から一般栽培が始まっており、販売面でのPRと併せて、農業者の作付意欲の向上に努めていきたい。 ○本年春にひやくまん穀の栽培マニュアルを策定しており、今後も県内各地での調査等を踏まえ、随時更新や改訂をしていくこととしている。
2	農林総合研究センター農業試験場	水稲病害虫の合理的防除技術の開発	H26～H28	水稲病害虫である斑点米カメムシ類、いもち病について、発生リスクに応じた合理的な防除法の検討を行い、これに基づいた新たな防除体系を確立する。	A	○環境負荷軽減には重要な課題である。 ○病害虫の発生予測が農家の農業軽減につながれば良い。 ○効率的かつ効果的な防除について、本研究は有効であり、JA単位以外でも普及に期待する。 ○予想図と実際のデータ検証を繰り返し、精度の向上を進めてほしい。 ○データ処理方法をさらに検討することで、新しい要因が見出されるのではないか。 ○一定の成果は得られたと思うが、その土地ならではの要因もあると思うので、普及には引き続き調査が必要である。 ○根本的なリスク大小についても原因究明が必要である。 ○山の近い能登地域へ適応した場合、減農薬栽培の推進に繋がるのか。 ○収量も大切だが、自然とのバランスがとれた方向への農業がさらに求められる時代に入っている。	○地域ごとの発生リスクに基づいた病害虫防除は、効率的かつ効果的な方法であると考えられる。ご指摘のとおり、予想図とデータ検証を繰り返すことで一層の精度向上に努めるとともに、処理方法等についても検討し、その土地ならではの環境要因の解析を進めていきたい。 ○能登地域への本技術の適用では、新たに気象要因も含めたリスク解析に取り組む予定としている。
3	農林総合研究センター農業試験場	ナシ・リンゴにおける新しい樹体管理技術の開発	H24～H28	ナシでは優良品種「あきづき」の収量を安定させる栽培技術を、リンゴでは省力的なジョイント栽培技術を開発する。	A	○高齢者や新規栽培者でも取り組める栽培技術はこれから益々必要になってくると思う。 ○リンゴのジョイント栽培について今後の進展を期待する。 ○リンゴのジョイント栽培技術のマニュアル化とその普及に期待する。 ○生産者からの要望に応えた試験研究結果として高く評価する。 ○実用的で成果の応用が期待できる。 ○新しい管理技術の成果を定量的に評価するための数値目標の設定が望まれる。 ○研究に取りかかったのが遅いくらい。 ○他の果樹での応用等、新たな農業技術としての広がりを探るべき。	○成果の定量的な評価については、労働時間や労働強度等の数値目標の設定を検討することとしている。 ○ジョイント栽培をはじめ、軽労で簡易な果樹の栽培技術等について、今後ともさらに検討していきたいと考えている。
4	農林総合研究センター農業試験場	砂丘野菜の生理障害対策技術の確立	H26～H28	砂丘地野菜の基幹品目であるサツマイモ、ダイコンにおいて、原因がはっきりしない内部障害（サツマイモ内部褐変症、ダイコン黒すじ症）が発生しており、これらの発生を抑えるための技術開発を行う。	A	○サツマイモ内部褐変症対策技術の確立は五郎島金時等のブランド力を下げないためにも必須であったと考える。 ○本県の基幹品目であるサツマイモ、ダイコンの病害対策技術として有効と考える。 ○内部褐変症、黒すじ症ともにメカニズムの原因解明に尽力してほしい。 ○引き続き本研究を進めてほしい。 ○内部褐変と内部黒すじが起るメカニズムを共同研究などで明らかにすることで、新規の抑制方法を見出せるのではないかと。 ○ダイコンの内部黒すじ症の軽減技術である地温低下技術は他の作物にも応用できるのではないかと。 ○ローコストであれば良いが、その点加わらないと普及は厳しいと考える。	○今後とも、サツマイモの内部褐変症の発生メカニズムについて関係機関と連携して継続して取り組んでいきたい。 ○平成29年度から着手している温暖化に対応したスイカの高温期品質安定対策に関する研究の中で、遮熱等を目的とした各種資材の効果について検討を行っている。 ○さつまいもの茎葉切断やだいこんの寒冷紗被覆については、生産者が既に保有する設備や資材を活用することで、新たなコストは生じないと考えている。
5	農林総合研究センター農業試験場	水稲と組み合わせる野菜栽培技術の確立	H26～H28	水稲と野菜の複合経営のために白ネギで初夏（6月）作型の開発、タマネギで春植え作型の開発、ニンジンでは越冬型における省力栽培体系の確立を行う。	A	○水田フル活用、高度利用を進めるなかで、水稲作業と作期が被らない新作型の開発、技術の確立に対して高く評価する。 ○ネギの6月出荷により、出荷時期が長くなることは農家にとっては朗報である。 ○他の野菜についての検討も期待したい。 ○春植えタマネギの収量向上について、引き続き期待したい。 ○農家の側に白ネギ栽培に対する興味や意欲がどの程度なのか調査が必要である。 ○普及しやすい体制づくりに積極的に関与していくべきである。 ○農家の家庭菜園ならばイメージできるのだが。 ○所得向上に限られるのではないかと。	○他の野菜については、ブロッコリーの新作型（越冬（3月）、12月、7月）の開発に取り組んでいるところである。 ○春植えタマネギの収量向上については、現地実証を通じ支援したいと考えている。 ○白ネギ栽培は、他の園芸品目と比較して栽培が容易で取り組みやすいことなどから農家の興味や意欲が高く、現地実証を通じ支援を行い、普及を図ってきたい。 ○従来より農林総合事務所等と連携した普及体制を構築しており、今後とも積極的に関与していきたい。 ○所得については、水稲が約2.2万円/10aであるのに対し、労働力はかかるが、初夏どりネギが約20万円/10a、タマネギが約5万円/10aと高く、有効であるとと考えている。
6	農林総合研究センター農業試験場	能登の伸びゆく野菜の栽培技術の確立	H26～H28	カボチャでは省力化技術として長期不耕起栽培および機械定植方法、ブロッコリーでは農業用保水剤等を活用した省力的な活着促進技術、アスパラガスでは省力的な伏せ込み促成栽培の開発をおこなう。	A	○カボチャの栽培技術でコストの軽減につながることを期待したい。 ○袋栽培など面白い試みも行われているので、さらに技術の向上を進めてほしい。 ○研究結果を踏まえた実用化には、まだ引き続き試験研究が必要と感じる。 ○アスパラガスは県産のものがほしい。特に能登が産地になってほしい。 ○これからは指導ではなく、研究を意識してほしい。 ○ブロッコリーの活着促進技術を実践するにあたり、何故キャベツの実証圃なのか不明である。	○奥能登の主要品目であるカボチャやブロッコリー、アスパラガスの省力化技術の開発は、競争力のある産地づくりを推進するうえで重要な課題であり、今後とも継続して取り組んでいきたい。 ○ブロッコリーの保水剤を活用した活着促進技術は、他の野菜品目にも活用できる技術と考えられ、現地実証を通じて支援を行い、普及を図ってきたい。
7	農林総合研究センター畜産試験場	おいしい「能登牛」肥育実証試験＝脂肪酸組成を安定化させる育成技術の確立	H25～H28	オレイン酸含有率が高い能登牛を安定的に生産するための育成期における適正な飼料給与方法の検討をおこなう。	A	○能登牛の増頭にも大きな成果がある研究結果と感じる。 ○着実に成果が出ており、今後にも期待できる。 ○米ヌカに麩の廃液を活用しベレット化するという一石三鳥の技術には感心する。 ○研究データを蓄積してマニュアル化に活かしてほしい。 ○米ヌカベレットの安定供給とコストについても今後検討してほしい。 ○農家にとってはエサとの混合、労力の兼ね合わせなど、コストの問題が今後の課題。 ○高値を狙う子牛育成農家にとってはメリットがあるのか。 ○肥育という試験の性質上、研究対象の頭数も限られると思うが、牛の個体差はないのか。 ○酒かすや米ぬかを飼料として、能登牛や能登豚に与えることで、「酒牛」や「御神酒豚」とかのブランド化はどうか。	○試験段階で作成した米ぬかベレットの生産費は、約55円/kg（物財費のみ）であるが、機械化等によりコスト削減は可能であると考えられる。 ○繁殖農家（子牛生産農家）において育成期に粗飼料を多給することで、肥育農家では肥育がすぐに開始でき、後に良好な発育が得られるので、子牛取引価格を引き上げることができると考えられる。 ○牛にも能力の差はみられるが、遺伝的な能力を最大限に発揮させることで、枝肉重量や肉質などを向上できると考えられる。 ○現在、能登牛については枝肉重量や脂肪の質に重点を置いた研究、能登豚については、食品残渣等を活用した特色ある豚肉の研究に取り組んでいるところであり、ブランド化については成果が確定したら検討していきたい。
8	農林総合研究センター林業試験場	低コスト再造林技術の開発	H24～H28	県産スギを使用した植栽方法の見直しによる、低コストで健全な育成が確保される再造林技術を確立する。	A	○本研究により再造林の労力軽減、コスト削減に効果があり、森林所有者への再造林意欲向上に期待する。 ○手間がかかる地帯、伐採、造材でのプロセスを省力化できる画期的な技術と考えられる。 ○グラブ、フォワーダ、マスターコンテナなど具体的な提案がなされている。 ○低コスト再造林技術の開発と普及は急務だと考える。 ○機械の検証、成果の普及、さらには石川県特有の要因に対してより深く考慮する必要がある。 ○機械を導入するにあたって、その購入資金がどうなるのか気になった。普及にはそれらも含めて考える必要がある。 ○苗木植栽機は砂地などは掘りやすいが、山林だと25cc以上の能力は必要だと感じる。 ○コンテナ苗の単価をもう少しおさえる努力が必要。 ○植林のシステムとしては素晴らしいが、木材が利用されていない現状をどうするのか。 ○気象や地形にどこまで適用できるかを明確にする必要があると感じる。	○効果や積雪等の影響について、県内各地での皆伐実証を重ねていくことでさらに検証していくほか、成果の普及については、小冊子にまとめ広く配布しており、今後の研修会などに活用していきたい。 ○伐採用の大型機械は、森林組合等に補助事業を活用し導入されてきており、主伐においても利用可能である。引き続き、機械の選択や運用の助言など支援していきたい。 ○開発した植栽機の排気量は25ccあり、これまでの使用においては特別支障はないと認識している。今後、実証地を増す過程において、改良の必要性があれば検討していきたい。 ○再造林の計画的な実施によりコンテナ苗の安定供給の確保や、資材や生産工程の検討などにより低コスト化を図ってきたい。 ○木材利用を促進するため、能登ヒバと県産スギを使ったCLT（直交集成板）の製造技術の確立を図っているほか、県では、木造が少なかった中・大規模建築物への県産材の利用促進を図るため、建築士等を対象とした講習会を開催するなど普及していきたい。 ○積雪地や急傾斜地については、生育条件や地理的条件が厳しいことから、管理費用が増高する恐れがあり、今後作成する「主伐・更新等に関する指針」の中に盛り込み、関係者に周知していきたい。

※A：優先的に実施することが適当、B：実施することが適当、C：計画等を改善して実施することが適当、D：実施の必要性が低い、E：実施の必要性が認められない